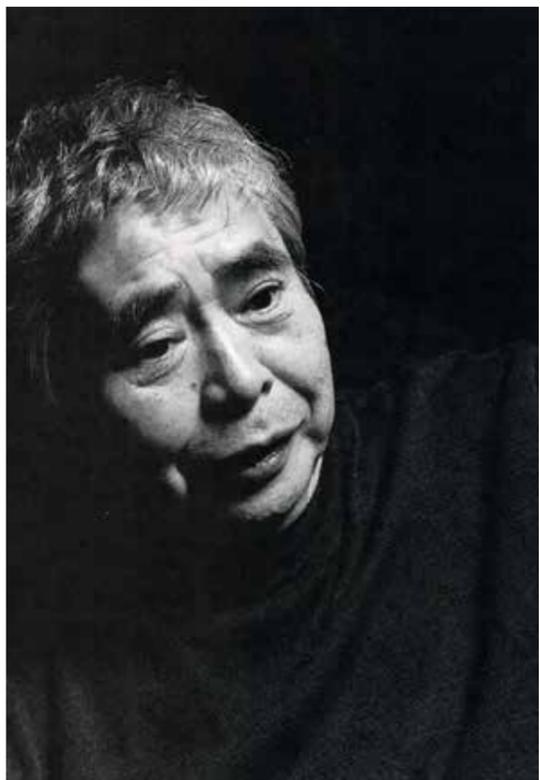


とぎがわ町で

「生命のドラマ」を描いた画家 三栖右嗣



撮影：秋山庄太郎

見 た瞬間に、「これすごい」と漏れてしまうような、迫力のある作品の数々。光と影の強いコントラストを用いて鮮やかに描き出されるモチーフは、人物、花、風景、そして、地面に落ちたリンゴ。これほどまでに「何(物)を描いているかわかりやすい」写実の作品群ですが、間近で見ると、筆跡が大胆に残っていることがわかります。それは、そのように見える場所に正確に筆をおける卓越した技術と、光を的確に

表現し、現実よりも現実的な表現ができる色の正確性、そして対象を把握する抜群の観察眼を持っていることの証左です。その画家が、アトリエの場所にとぎがわ町を選び、この町に住み、作品を制作していました。その人こそ、戦後の芸術界に現れた、体重100kgにも及び巨体を持ち、酒好きで、どの団体にも所属をしなかった型破りな画家、三栖右嗣さん。「絵描きは作品がすべて。言葉はいらない。」という信念を持つ巨匠

は、自ら記した言葉が多くありません。そんな画家が一貫してテーマとしてきたのが、「生命」。それはどういうことなのか。作者の生い立ちや時代背景がわかると、少しだけ感じ取ることが出来るかもしれません。

● column

絵はどうやって見ればいい？

特に三栖右嗣さんのような写実的な作品は、遠くから見て、近くから見てみると良いです、とのこと。まずは「これはすごい！」でも大丈夫。そこから、どこがすごいと感じたかを言葉にしてみると、より理解が深まります。「なんでこれを描いているの？」と、もっと知りたくなったら、作者の人物像や生い立ち、時代背景、作者の言葉や残したものなどをもとに、絵のモチーフ、構図、色など、なににこだわって描いているかを探してみると、より楽しめます。顔にも注目。さて、では三栖右嗣さんは、なぜ「地面に落ちたリンゴ」を描いているのでしょうか？



↑安井賞受賞作の習作。三栖右嗣さんは「私にはシワ一筋一筋が思い出深い記憶」と語っていました。『老いる(習作)』(油彩,1974,30号)



↑三栖右嗣さんは好んで花を描いていました。ひなげしなどの、薄い花びらの儂い花が好きだったようです。中でもコスモスは最も多く描かれており、「コスモスの画家」とも呼ばれています。『秋桜』(リトグラフ,1982)



↑「海のシリーズ」後半の作品。透明な美しい沖縄の海を描いた作品です。『光る海』(油彩,1997,120号)



→大学卒業後、一水会に初出品した作品。プロとしての画家のスタートでした。『室内』(油彩,1955,100号)

● column

三栖右嗣さんのサインのひみつ

絵画にはほぼ必ず本人のサインが入っています。三栖右嗣さんのサインは「miss C.」。「三栖」を「miss」、[C]は大切なお母さまである千里さんの「C」であり、あわせると「ミス千里」になるとのこと。ここでも、お母さまが大きな存在であることがうかがえます。また、三栖右嗣さんは絵に溶け込ませるような形でサインを記す場合も多く、「サインを探せ！」状態になることもしばしば。三栖右嗣さんの遊び心も感じられるサイン。探してみたいかがでしょうか。

制作に没頭しすぎたため卒業制作を怠り、卒業が2年遅れることになってしまいました。卒業後も写実を重んじる公募美術団体の一水会に出品をするなど、精力的に制作をしていました。この頃の絵は、まだ現在ほど影が強くなく、以降の作品に比べコントラストが弱めな優しい印象。しかし、卓越した描写力と観察眼はこの時点で既にうかがうことができます。

しかし、1960年代になると、時代は抽象画のブーム。「抽象画でない絵は絵ではない」と呼ばれ

るようなこの時代に、写実にひた走る三栖右嗣さんは、世間の抽象一辺倒への反発であったのかもしれない。作品を10年間発表しなくなるのでした。

1970年代。写実主義が盛り返してきた頃、それまで映画会社で働いていた三栖右嗣さんは、作品の発表を再開しました。そして、大きく世の中の評価を得てきます。「北海道シリーズ」「リンゴ園シリーズ」、「海のシリーズ」を

発表。1975年には、沖縄県の日本本土復帰記念事業で行われ

た、三栖右嗣さんは、1927(昭和2)年、頑固な父と思いやりのある母、二人の姉と早世した兄を持つ4人目として生まれました。1945年に東京芸術大学に進学後、自分の

た、沖縄国際海洋博覧会「海を描く現代絵画コンクール」に応募。『海の家族』で大賞を受賞し、約4000点の作品の頂点に立ちました。

そして、衝撃を与える作品を発表します。モデルは高齢の女性。刻まれた深いシワ、肋骨が見えるほどやせこけた身体、身につけるものは白い布一枚。思わず目を覆いたくなるような「老い」を直視させられる作品「老いる」と「生きる」。しかもそれは、これまで画家をずっと支えてくれた、80歳